居行子

1 5
1424
3

早稲田大學圖書

二麻

早稲田大學圖書

居行子 巻之三

目録

儒者之説

大莊子

酒茗論

門 ち
流 1424
巻 3

早稲田大學圖書館
昭和27.6.16受
藏書

居行子巻之三

儒者乃説

儒音樓學者之稱揚子法言曰通二天地人一曰儒周禮曰儒以道得民風俗一通曰儒區也言能區二別古今也

こゝにいふの注をいふくはしくいふよ天地人のこゝろをよく通じ古今を區別しこゝろを治て民を治ずしてその天下を平治し國を治ゆ小にしては家を齊へ身を修るの学を勤。これ儒者の本意也。

按ずるに孔門の書よりこれ諸子百家の書をのこす紀まちくにしてこゝにまでも。身を修ることをこゝろんぐみこゝろ。天学よりあらくく身をさきにおこなひて齊家治國平天下にいたる。洛國氏乃

七千余年の日をさす猶のごとしつくしがたしそのことをもつて外
はたらしつのごとうしなはしめでもくよりはたらしめ野人は文華を
ともなはべし君子は身を文学にしたがはしめくくと
てさえん安性をもつてかくし故に行有餘力則以学文文質
彬々然後君子となる。孫子成ぜるく。君子は質のみにして
人なる法なり。文猶質質猶文也。家を恃するは文にして家
を約するは礼なり。文質は勝とするは則史にして繊なす
くなる。史官同前て儒とすべしと。子謂子夏曰女為君子
儒無小人儒程子曰君子儒為己小人儒為人子曰古
之学者為己今之学者為人。ちなみに今時儒者と称

するものをなんぞ伊洛の朱子学は古義堂の門人系を
徂徠の門系某の陽明の学流を通学御氏乃門流なり
ちなみに名代のまが門をかまへたりとをもつて無学
乃衆人なる家情をもつて学問なる名利をもつて暗ぽくなる患
人之不己知故虛誉雖隆而実徳則病也。まづその朱子
学の門人なる者をとりて徳行を学ぶべしを法ぶ。文学を
いやしんで押して学ぶ朱子の楚辞のやうなるまで注をせら
きて情学のことをこれ歴史詩学文学諸子の事
よい基礎。小学近思録名のやうなるものよりわけて文を法として
家を恃ずすなわちみなれば田舎おやじのやうれる人相

ようろう。漢土日本の風土の異なる事もさることなれども日本の法は
ひとえに父母の喪のごとくなりまでなるべきなり。姿形は男女七歳より
して席を同じせず。ひとりとかさねてうちそえ来
日本の水土は生まれ時分遠く唐土の形義作法千里を隔
てる日本人のかたくなる油は水のまじらざるがごとくなれども何ぞ
やん面白うて孫の内證をうけもち身持。出家は女色を
断ち絶えて義とかごとに門流の會合は世をとそうこと。
朱子程子の糟粕をのみ嘗。時務はわろき事なりとい
てわるく悟りはうとくして國邦を治むることを忘れ
ぬ。大家の生涯をきはめて多く

賢不肖の仏をもつくるべきもたぶ。顔子巖子乃
ち聖人。孟子はよりて聖人。数はわろくなりもあるべきと書
曹洞宗はたとえるかたちわろくなりかたくなり。今時身を傷ること人
びとあしかるべく。質文は勝れるこころまことに野ならんわ
ろ。孔子先生の門流は甚だ意相似ならず同門より
合てなんぞ行路は鳥目百線落くわんぶ。拙くるがよ
きやまこと捨ててわかるべき道をわかるべ。形くかたちの者をて
やんぬ。如何うどいくたびこの事を議論しくれ特の自
反かくやわるんぞやわるんぞやるとんぬ。思とくく。

いづれも不経術の人多く、内證は佞佛狠のふるまひ。貴
かるべき者の断耳を捨て、鈴を盗むなどの、聖門の事とも
得る所なくいやまし。監司たる気味あり。かやうの所は一町
の富老の名聞さへ、ぬけまうでかたしとなる。世界にも悪人
多くて、右のやうなまつりごとあるやうにこそ。しせんぎでこそ
乃人のたぐひもすくなきものぞし。一命をなげうつ人、苦悪
のくるしみよりも、孫ばかりあるまじきものいつくや国王大臣の大なる
をや。乞閑を富し、衣食足りて、業厚を知り、刑罰教養を家
ごとにすべきなり。孔子も大司寇となりて、定公を相く。
決獄の書、その人をとり、又相のことを摂行とぞ。

叫正卯を誅し、十日右を少紀り、婦人の仁、
聖門のふるまひ、ものもとめ、ものよりも、費隠の章乃一枚
傳要も知るべし。古義堂の門人、今は二十年
ばかり以前、荻生の学、又以の門、其門流これ。
孟子程子朱子等の清賢、堀伊蒙等乃諸
儒、ともに簡子とかや、干鱗世貧、ものしれ、作乃ものも
まづ、もう以書にまでも、ものに、朱子の注を一遍とかも
まだよもぎ、朱子の論、如何して得ることもせず、
ぬけがらよ、徂徠の解よ、知らずして、一乃大虚
にかへるべきなり。書物も徂徠の書を

表紙も唐本仕立よし。德行のことは一向に廣くいひ
華言をつくし樂器を張じ聖門の学問は大略以上沙數よ
わづらはしくて開しがたく紙筆に絶よ沙數。但徠
自身書紀を祢し。儒といひてもつぱら文字のみ
古文字家かく。文章の力競のみ。学者乃風
ようやくあしくなりたる。あくまでも文勝質則史
といふべきなり。但徠先生其身一世の秀才博識
なる人かよまれ。質朴風の学者を文章と云て云
文をすきび考を祢しめらるゝ。仕士
学紙よりいやしくなる。論語徵をあらし。世上の耳目を

たとゝ。大カ紙を不思議なる。明無啓山が
著述乃書よ。論經と云書なる。此書其外一部沙
官庫よあり。世上知る人少。但徠是を一見ならず
迷ふと。秀才ならぬ其意を已ず。論語徵を出
せり。其後年後て論經世上よ流布する。無啓山乃
意と但徠と暗よ分ず。論語爲政
の篇よ。子張學干祿と。但徠乃說よ。祿を求ることを
学ぶべしと。干祿いわゆる書名也。子張干祿乃書
を問ふ。といふ。ものを記ず新發を爆する也。衛靈公篇よ
子曰君子謀道不謀食耕也餒在其中矣學

也。禄在其中。矣此の文ハ禄の章と相通ずる。多聞闕疑、慎言其餘、則寡尤。多見闕殆、慎行其餘、則寡悔。言寡尤行寡悔、禄在其中。矣此文の意と相考へあはすべし。如此のことをしるまでもなく英雄よく人を敬くかゝりし。荻生ハ英才大力。楊雄王世貞が徒にて徳行の塲有よりわづかなる其門弟文学を以人よりたかぶり徳行をつとめずと嘲て罵り。文人を気どり酒をたしなみ唐詩をうたひ琴を鼓しするなどひとへ学者の嗜とおもひ。青楼のことにもふけるなるものもありて行跡を識るもの人とし。身の慎みに大きに害あり。これまでも聖門の本意にそむけるならんといづれも学者はいかゞなるべくて。

儒者とさへいへば風雅を旅し俗といやしめ行ふことも唐乃士なれすゝめと是とも中庸よいろく君子素其位而行不願乎其外素富貴行乎富貴素貧賤行乎貧賤素夷狄行乎夷狄とすべく聖門のをしへハ今日のなすべき事其人ハ其所にしたがひ人とも遠ければ其所に従ふべからざることなきは俗事をといやしむべき事もなけれバ。其身日本の地にうまれ。日本の政道を受る身なれバ。和朝の風を嫌ひ。唐乃風をたつとぶべきにあらず。唐朝の和漢のへだてなく。また其のほかを受るもところあれども衣服器財飲食等の事ハ求てのちにひとり其年よりおもむきて大分わるくしうんが聖人乃

作法にも井田の法とゆく今日本の役務の法則とたん
とをべ。一けもまうまくべ。唐土乃衣服を着くいう中を
表にとをたとられ。俗る麻ヶトうるでの礼義にうべ
たく傷者ごろの如無とも敵ちよ外国や。家備や。弱る
どの作ごしごろふく。唐源の物にて脳とすくべ。ごまう
のまもれかふ。家まで学ちとを味うるとをあろ。
れをしんう。取くく乃道ぷく今日の身を備
家と齊へるまをまるべのを本とまるべ。ごまりに門を
かまく議論とも今日の身のれをまを及ちるれを
空論うう孔子用しらをたまのごうし法をを兵法も

あをを。ををををらをて天下国家を治めたまつで。
尚湯文武周公のごとく別よ書物かまを。書経を時の国史うう。史記漢書をと
りををのう。今日のまを書紀をを書うう。法よ
いづをの書をを。和邦よ用いをるをすのまをうべ。
一章や二章ゆけの意をを所わりて除て五をを聖門
の問答を。今身に引く。身を備るの要用をうる所を
得意せべ。一章をを。誠よ聖人の学をうべ。論語
中にも告朔乃羊の意やうやをを。ふとかくべ。引
用うよわくべ。日本ようをを本更。を注のよしわく

のせうわひもいくあきそうぞくしぞれたる儒者うんを湯く
治世する人いにしへ人の遺言をたづねて賢人の書を
をあつめ。法をあらためて六經四書史記左傳漢
書晉書世說唐詩選明詩選の類もとのくたづね
ものをたづね。おのくもすまもあるべき。其代物服
ものをうりて賢人を合張せめ中くよ。酒かやくよりは
きまくも。吟味よくしくべきすべ
いたうり。高ひくものよせめ身へ。紙澤先ものごとく。
集義和書かりやくしく。書初もとのくべ邪がくく
ちて。門戸乃かざりもいくあらう。君子傷のこどもく

すふ人をうれたうじ。人乃ためする人をうれ聖
学の糟粕をのくあらまんけ。面をの所をなれ
きうう。莊周が寓言も列子の類をもそとと
ばかり。たくくべ論語乃中をも。德行よ
りし言論をすぐよ身ようけきてすんぶもさ
もうれ今をあり所を。家身へらされろ考く
学ざきべ公用とする。道千年之國敬事而信節
用而愛人使民以時とまくの章を千年の間
をたをもるこのくたをしてい益する。此乃一身
よりをたうてくべ事を弱くたくん。

幼くたゞいさゝかなりとも。人より信をうるべし。倹約をこゝろがけ。家内乃入用をわきまへ。節約を愛し。人を恵まんと家内の人を使ふに。自用よりて。家内のせわをなすべし。奢侈なるべし。高用。仕事人なるべし。公用がゝらの表用。妻女をたしなむべし。縫物抜より。内の用まめさつゝ。すゝめ其外の時よりひ生ずるべし。のづから家内の人帰伏すべし。人にたゝるとも上下恥を知れを知。家与く仕さまるべし。又直哉史魚邦有道如矢邦無道如矢君子哉蘧伯玉邦有道則仕邦無道則可巻而懐之この章のごとくなれば身よりてこれを世上をいく

わるくとも自分之直を守りよくまことの直のこゝろをいたすべし。身危し。世上直乃をとゝのへてよりけまで出身して仕直をなのまゝ人よりこゝろ合てもよりけまで。若人世上わしく政をなられをまさに。人のわをかけたるも已ぶ抜よをまさるを知恵と仕をなられど。身を退き事をひとりたん居れば。身わやすくまと知れ。用きだすぐる此身の教とぬべしなれば聖門の書い勿論。歴史諸子百家の書。名勧善懲悪なるべしとなれば。あるいはこゝ今の儒者ハ本職ハれく空名にくく稽古者同拘るまでよりこゝの社会者會社ごとぜんにくさめ尊敬すべき事にわくゝ居る

大宗師

名乃名とすべきなり。名乃名とすべからざるなり。天地の始なり。
てよりて系なり。何系なるや。世世の家業なり。
つぐ。ことなり。齡も知命にちかづけり。跡
術衆人よりまさりて。ひとりて人間乃術よりたかし。
増し。各師傳の上なり。未をさとり。特来をさとる。
法命もよりたかく。その奇妙あり。茶香乃風雅もものを
よりも。諸事乃動作乃智恵乃海より書あらた
よりも功者なり。ずいまつ乃月乃たかきなり。
左盃乃貴うきことを為れり。身上なり。

繁業して第事富饒なるものをうべきなり。
真上見識を荘子たるべく。自然乃道を歩むなり。
万事たんぞくの人となりて。ものさうに。然もまた天道にかなふ。
そもそもものにて。此を第親類のごとめあるべき。
業ようの経法ども。さかさまり。捨てもたるまじ。
かるべきなり。身上のいてことをうべし。おさまりまるべ世話
よりをとりたる。病人をうちたべき家業ごとにもたるあ
撰矢たるべ。かまやこれやと。如若おもう。をまあ行と
そんをのべ。倹約のこころをうべし。むしのそこをうべ人に。其
身も退屈くるべ。乳病を知べし。すべても陽気

すくなく顔色も血色すくなく青ざめ別段の疾病なとなく。
自分耳学文のちく被に医薬を服すすまさるも。
とく出家すれば世乃人とうとん身
齢より弱くしくしわるをこれば數年なとなくせ
ト並も諸人の吉凶なとへやまてこ。たとへのごとく自己の
将来の運命兼てその体をうんべき筮もるべし行未
乃高第にて。奇を妙を乃相術も自家将来乃
病人。吾身の病気の来を知ること能はるを
わるべれば。人相を考へ人もさてかゝる事もて。
世人よすぐれて効験ある弘法大師乃身体

のようにようてこそ人よまさりてすぐれもあ
祈べ大事よ功ってこそ自然をたのめ。荘子のことばに
とて仙人どもちべ人わまべこと仙者かこうまでまあうこうちと
志こそ自和をたのし仙丹をこうる仙術まとんく浮界
通世の人をこそ通きてこそ年のうちい浮世にて学乃
業や若川のみよ知つべ。世俗のすくれとこと出家と
でうよ知つべこそとこうやし荘子の意を得さてこそ
そのうべ人事をこそこうるこそ人の自和よまうこべき
まうこべ。祈乃の吉凶なとを筮てこそんと行の益う
わんやト並い聖人のよにあてる易経を本とすこま

うるさび。衆人いとやすく学文の徒よりてうまで。名を拘泥してまよふことなども。ぞがたをこの易學の辯よりあ洋よりあ
ぜ〜ごとく。聖人の易に教を本とし。卜筮を借て。ぞ理を明
らかにのぞうるさび。人事を盡すの上。ひとすむべきこと
吉凶を。鬼神よりたづねとめらん。祈禱山伏のこせめまちの人。
或いと多くまし〜。射覆等のすべきこと。教びのおこないあるべし。
世俗の上自反の二事をこゝにたづねずして。鬼神よりたづねとそ
をこうる所よりてこんや。相学の人相の辯よりこうる所ぜんぜ。
聖人の徒より出ることあるべし。たとへば卦子の妙を得ても。本末の
体を。かゝ得て相者の言のごとくすべをこび。表ひさまこの五倫の

人情をこゝろ。こゝを出て。今の上すむべきこゝろ。人乗の
上い。其人〜のうるべきこゝの人事をおもはかり。
明恵上人の教のごとし。荘子も妻妾の喪を金をうつく
うこうんや。両とこゝるごとをはなれてうるんかのもむ
屋をかれ〜ぞとこゝ屋をを怪びかこゝもやぶを
ぞ。たとへばこゝもうれぞ海をこゝ人のこゝ新
天地自然の妙を得意して。水火よ入ても心のまこゝをを
ぞて。真の性をこゝ人とやいはん。愚荘子を浮ぞれがこの
本末をこゝ。ぞとこゝ。彼ぞこゝれぞこゝ糟粕のこゝ何乃
得ぞ所ぞやこゝよ入こゝ。ぞけど水よ入て。ぞ皇よ。ぞ

まず前よりかくしたまひぬ。怨結して後よりあるの妙を知るの知識たちと人ども。雪のふる行いうくことをあるきの。凡情よりかたくを以道徳堅固の人とも。人くよ荘子そうとまくく人うくぶ。主を同どして慢ちのあうう。徳の酒をるいまとの徳あるとうや。面と大悟の人い衆人とけく。凡俗の眼ちあるとあるくどト笠掛学を信じて。将来を紹まと苦まぷ。ロよ荘子を称すちとみまぷ。の自然をふまべ。将来と知る術をやんよ。ロよ荘子を称じて。術よト笠掛学をそる信すぷ。ちを称しく。雨よ歩すがぶわし。嗚呼可笑のとるちぶ。世人くちとをとぶんをしてぷの人

の利ロよ惑されく識あるの人とに衆人の嘆ち大後むしくしちるを行しをけぶくきめを

酒茗論

去兩のいやを去ちやうちうぶに。霧ゐさびくき眼ゐふ色やよ。
ちとうちうの友人等ちて。酒世ぐちうどするちに。鎮力泌斎の志ちうよ侵ちを。建城と聞て茗と烹後弦の眠とさまし。杜康を称して酒を風茗とうち。友人のちうよ茶を好人あう。酒を好人あう。酒を好人よりを。酒を飲ちむしに。ず茗ちのでちを性質沈重にして。ちを疾病茗よ衆をとうちうを聚の病ちるや。七情の乱鬱結すく間て疾飲を聚或い飲

食停積し。終に結堅硬塊のごとく成り。心下否硬し。気散ずれば柔軟なり。其上に冷かなる物を食へば。夜発る。寒を嗜ぐ。酒を嗜べば。衛陽の気ぐり。法く。極めて多く。裏をうれひ。酒を嗜べば。大に其益あり。酒の血極を発して。腸胃を潤し。皮膚を潤す。憂を消し。脾気を助け。沈酔して。鬱滞を散ぜば。生を養ふの助なり。茶を好人の多き。大成醒す。彼人自己の好物を以て。酒の徳のごとを挙て。其害を忘る。酒の大熱にして毒あり。其気の猛烈なるを以て。よく気を損じ。鬱を散じ。憂を解す。故憂特軍と名付れども。頗る怒気を

動し。久く飲べば神を傷り。湿熱腸胃を腐爛し。筋骨を軟し。終に毒を損ずべし。ことに人聚をうれひ。因て時に気急病気の疾あり。所謂端良に似るの病なり。其時に一滴の酒をも飲ことなかれ。酒各其性あり。鶴の脛名の如きもの得て。酒を好人の口に生を好むを好む。酒の小害を挙て。大徳を賤む。大酒呈あり。地に酒泉あり。李白に酒名を著す。素問に赤酒糯あり。其始黄帝のころにして由てきたる。酒を去て。冠氏燕卿いづれか酒よりあるべきや。吾朝にても素盞烏尊。脚摩乳手摩乳を以て八醞八甕の酒を醸さしむ。舊事紀に人あれば神代よりのこれり。今世俗のよりても貴ばと

うく国を失ふまでも喪祭のまつりごとも酒を用いずとして
ことあり。君臣夫婦師弟。其外伝るものかたんらも不五をかう
かう紛とうるもの志ゝとそれ記るも飲酒かまいわれども。
茶れわるまうう。茶を好くの因生酒をあむ中くよ茶れる
ゝいやしん。家酒をたうまざるを以て酒のまをきゝずと
するれ生のみをうれとまと雑ぜん。茶下のいとたよ酒星
わり。地よ酒泉あらいづまも人意よいるゝ少ゝろ。ゝづまの
神わうゝ。天地開闢より草の星酒星ちそれぞの泉酒
泉ゝを芸んや。李仲己よ名わうとゝ。ちまを赤ゆく
帝の名をかるゝども。三国六朝わうの書うそり書

近世始く附見するものわり。地名又前後漢の時分に名ゝ
変をきるゝ。六国秦漢の間よ偽作する書うりをたもう。或説
よ安康より始るゝ。文選の注ゝ。杜康黄帝ゝ少ゝ
のゝうと。又黄帝内傳ゝ。王母會山ゝて黄帝よさんけと
すゝ。米とい文空桑禮書と醸て醪醪とうそと。
又戦国策よ。儀狄い帝女酒を作ゝ。これを禹よすゝ禹れ
を耳ゝ遠よ儀狄をうわうゝ。古史考呂氏春秋亦同
博物志玉篇陶淵明集。各杜康こまてと作ると魏の
武帝の樂府ゝも。何以消憂惟有杜康とたくまう。杜氏ハ

とと劉累の末人高の時豕韋氏ほろぼす武王ことを杜国
より封ぜ。後宣王ほろぼすを殊せられ子孫晉より奔く杜を
ほろぼく氏ほろぼす杜氏周の時くんぢまり。末後杜伯といつとのく
酒を釀をほろぼく。世よ志ることをてるるをん人始て酒を作ることも
わることを。右諸説紛々たりといつぐ。ぞ。ことたるるよりと
どころもるる。又壹鍾千鍾とのことを孔叢子にあるまでぞ。
委巷の説ことを信ずるたるもの。関原子曰ことの智者
ことを作ることを。天下後世よ傳てよく虐ることを。酒よ聖
人もの好むものを作ぞ。郊廟享燕よ用て祭れのをとを
後へ。いまくい飲食することをとぢ色不の

人をあるる作ぐも其好く酒をしてまるを人を以ものを酒と
のことをほろぼく誰ことすわることをいつぐるをたいことを
其事詳ることるる好る爲ことそう我　朝ことる舊事記よ
出るたるをいい神代乃手ことをぐぐたることを始めも
ぐことを。古事記ことい神功皇后之韓退治ましましく
後響田皇子氣比大神を拜祝の爲ことよ酒をかもして皇
子帰りたまひことたることを。皇子ことをとことを武内
大臣答ことをふことを酒樂の方ことを。又應神天皇の
御時百濟国ことり酒を釀ことを。須ことを許理とつ人
をことを酒をかもして勅ることあり。ことり酒製法ことく

ありとこそ云へ。妙なる所を詳しもせん。漢書食貨
志云酒天之美禄帝王所以頤養天下享祀祈福
扶衰養疾百礼之會非酒不行又云酒百薬之長。こ
れ皆酒を賞して甚だ尊ぶ。筍信曰酒は酒を賓
主親疎と合親疎情を慰し。喜を助け病を去り人の気を
やぶり。茶を作るのわざわひ少飲時の則絶を通し。気を
ほんし。茶人は盃わ。飲時の則ちを助る。疾を去る。
大よ人を傷る因なし。酒を飲む神をそこなふ。茶を損
ず。去りあるべし。酒酒を時に謹貴の人も変じ。任妄
乃後しうり。志屬を感し。時を度し。事をこしらへ其職業

に怠り財をやぶり。家を亡し。或は酔よ家ごとに言まで紀ま
をやしなひ。身のそこなひを手ばしこと。
其醜態備り極る。妻孥の恥辱親戚よ
忌はる。古人酒を禁じて任業を宜しく。
酒を量し。故よ及びて聖人もすたれぬ。
此ものの。祭祀のそなへ。地を灌ぎ神を降して馨香
の下よ達しをそなへ。陰よ求るの儀也。陽を表
を以て。梅よ親よ孝。老を養ひ。親と会を以乃ち
ちまちを冠昏の礼賓客の儀に用ひ。ちまち賓主百拝して
酒三行を以て飲て酔しを。未曾を飲よ及

そだ志ゝまでも吾俗い弱と懲しゝと得ちてやくもすきてを
盃と茶ゝ平生の懐とゝすき可ゝるよ加ゝるそやゝ和
く沈酔よ及ぐ常ゝ人と茶ゝ元人の酒も酒ようて
めゝ茶ゝ藉よんゝ藉よれ及く酒を飲ゝて藉と女く
食ゝもの毎ゝ寄ゝで加ゝ禽の旨酒をけゝゝ後世よ
徒ゝんゝてゝかゝ加ゝるゝゝ滅よ世上酒と
嗜ゝで茶ゝよ飲ゝ酒毎よ勝男と為ゝ内扶すゝよ勿ゝ人ゝ
茶酒よゝく身とあゝまゝ人同茶ゝ和のゝ此徳ゝ
とゝゝ甚書ゝと甚ゝ茶ゝ茶ゝ茶ゝ山ゝ酒を
好人いゝく生のゝ家ゝんゝゝゝき世生のゝ山系乃徳

及び其禮を聞ん茶と好人乃いゝく茶い寒ゝて毒ゝ。
痰熱を去ゝを下し食を消ゝ毒を怪ゝし。唐土て
ていゝ神農氏ゝ茶経よ書和邦よして上古ゝ
の茶ゝく接茶の節會て内裏ゝ行ゝ海人
の藻茶ゝ知ゝ陸羽ゝ茶経清逸ゝ遠上ゝ王ゝ通
ゝ下ゝ林野よ逮ゝ。亦雅ゝ和邦ゝて足利将軍
義政の頃ゝ茶礼ゝ千利休よ始ゝ世人乃
ゝ新ゝ今貴賤ゝ
の茶ゝ官武ゝ
情ゝ和ゝ人ゝ

和国乃一大礼とうたふ。故に老ふることをたのしんで人に睦じく。後世の愛しむ。酒の庭を生じ。乱を多く害あるようまさるといへども。酒を好人乃いく。世茶を好むを以て。茶の徳をあげ書といふ。ことを解して。足下が酒の辯に言んのごとく茶い神農本経に載らと人ども。足下の所のごとく六朝の比の書なるべし。往古より世もいはれも。茶経に神農よりたるとつたへ。経よりする也べし。茶経に又周公より世に聞へ。晏子揚雄司馬相如韋曜晉の劉琨張載遠祖納謝安左思が後皆これを飲うとあまたかつ。周に始るとも。晏子春秋に

志韋曜が傳。名茶の事あり。青風堂随筆に。漢に始るとつたへ。家礼考説に。晉より始るといへ。洛陽伽藍記に。梁の天監年中よりこれを始る。所ゝ古に始る。周の末人よりすでに用ひ来る。衛次公よりあつまる。和邦海人の藻芥に上古よりといへども。何をもて澄穆もす。弘仁六年四月嵯峨天皇江列滋賀韓崎に行幸ありしに。宗福寺大僧都永忠茶を煎じて奉りしに。日本後記に出る。又後朱雀院のとき惟宗孝言茶瓚を作りて其銘を記して。續文粹に入たり。銘に蜀山乃産する所あり。是虞氏よりきたる茶

を補するゝん。茶湯紀よりいとく。建仁寺開山千光國師。
栂尾明恵上人同船して入唐し給ひ帰朝しけるが。
茶の種を持かへりて。筑前國背振山にうゑをき。宋土
茶と呼ぶ。上人こゝを栂尾へうつし給ふ。宇治へ移る。
宇治紀同元集よりあり。是日本に茶をうゑるの始なり
所くよりおこりて。仁和寺醍醐禁室般若寺神尾大
和の室生。伊賀の八島。紀勢の河居。後河の信貴。武蔵の河越。江
州信楽の數品世人の知る所なり。雄にも數種あり。宋鑑に葉
上備正。茶一袋を大将軍家に献ず。喫茶記とそ
えゝく持しとあり。こゝ三日本の茶を称するべし。今の上王

候より下衆民まで日々茶を用ゐるとゝうに紀春
雨抄云。栂尾山の茶のみならず。今和國の
風俗。婚姻の結納茶の時。茶を副ることを例とす。是明乃
陳晦伯が天中記に。元種茶必下子移植則不復生。故
聘婦必以茶為礼義。固有所取也。とかゝれたり。俗この
和をとり用ゆるこゝろなり。右の諸説を以て考へるに。後堀川
院の御宇茶湯より日本の茶の種初しるべし。茶説
に唐土より来る所の茶の本草に。馬信曰茶を飲を。
唐も大和もこゝろひとし。こゝろをとゝに賞翫するなり。
をろそかにしてもこゝろを尽すべきなり。家國よ及べくるぶ。わさけのそなりけすでよ

うびとうぐ〜ぞのかくさよりあてうれくへもいをまをはむるのいはよ
うんてびとつてとうぞとを拔て考こまびゑの世よ基第とこの
ゑる人を朝ろ多よ至るまでびゑ庫ところ煙を除臓を去乃功
あるとも又疾飲痞脹腹痛洞泄等の要とうしいを第れを
後土御門院文明十一年宣利將軍義政東山東求堂よ同住
銀閣を作る北山の金閣よ准ず東山殿と号て古器古畫を
拔び茶器を集る年月を送る第の礼式ホこれ茶ろ
こぐ事る飲食ところれるくんだ物べるこれば義政卿乃茶
會の礼式をこ〜まこれ利あるよ似ることも疎れ汚こる
古器を拔びて手等を後世まで拔れるいたる罪なり。

紹鷗まで古器物も有よまこれ用へされこよ者を好まびたき
世よ入て千利休とき乃出こ茶れを真似し金乃事
を増添ふ世間三千貫の財を費して茶器と交易せり今
世よ及ぐ唐乃茶壺あるひ古乃茶器一つを千金を拔て
賞永乃人あり抑乃益ども家乃用ることを云べし山年
飢歳よ至ることを拔く寒土貧民を拔ることを拔ども一揆の
第よ及ぐべ兵役車陣よ及ぐことを拔く新を始
せぐこと事よ一乃用よ代ぐ累病沈痾を拔てこれを
養ぐ服ることも命を拔べ。拔まびの別用を拔行事や。
新ことそいたびたくよみ。たこと言葉のけだものけだ言葉

きとうすることに費へうどの法ばかりあるべきなりのよわ〳〵ぶるつうへ
よりもすぐれたるせんとて閑人の節義を修して人の餘をのんで
いとゝ貧乏の香気をよろこび世の榮をさまし空の泡音
に心の濁りをすまし禪道よりたゝりて物欲を屋ぐるを
むこと本末をとゝのへ近世の茶をとゝのへ法を修して
相會しかるひとあやまりつゝ世ずきとそしり茶具を閑弄
すると沒とゝ。其具の德をもあへど。名よ吹名聞よりすぐ。
いうて茶乃本末をとゝのへるくしてもたゝの具わるぶれど。
いやゝ〳〵あるべきなり。人〳〵もて價の貴賤を多く
所望すべきなり。茶具まい元来俗身齊家益

ゆるをとゝのへるべし。東山殿銀閣より退居わるゝも。家臣山名
細川の大名をあづけ給ふ。其身將軍職にあるべし。
茶を場所の仕業を沒べし。天下乃政治のゆきかゝれ
ばゝ。風流のゝ茶の本末をとゝのへるべし。
にもたゝ。閑家の大事のゝ。大切なるべしとて
千家の奴婢とうるゝ。ゝ。ゝ。時茶また拘法なる人が
多くの財宝を思ひ入い風流の法びよ費へ。先祖乃家産
を作り。貧窮よりあべ人まるゝ。滅ぼする害とゝべし。
仕事の害すべとゝ。これ人やらせるべきのことゝ。法
しべきなるべ。遠里曰ありゝとゝすべ。法の德

茶の害茶の徳酒の害酒の徳

酒よりおそるべき物なし。万物皆造化の
ままなるに、酒は造化の財宝を身をたす
くるの物にして、富多き人もやすく貧窮
なる人もせんすくなし。されども其民和を
ぶべき物なり。酒は身を亡ぼす。また財宝
の仁を命をそこなう。禾の命をそこなう。飲食すれば
食傷食滞の疾となる。塩くれば紙多くの害もまた
しれい身を約にすべし。人身和よりぶべき上下
尊卑老少親疎乃貴賤にまんべんなく。国家にまつりごとの
のまるるにも和を初とし和をもって貴しとなす。
かやきぬ茶を飲で茶乃徳をさとるべし。

礼をすまし法度乃仁義をとうとぶべし。
ちまぐ茶乃害酒よりまさるべし。茶のまるる
まるべく。酒を嗜ぐ酒の徳をあらわす。豊をやぶり血脈をそんぐ
らし。養老の仁をそこなう。人よりつまびらかに醒
酔を作して燕郷の礼をそこなう。酒よりまさるべし。
両牛のごとくにして各是をすべし。悪ども其善をあらわす。好ど
もその悪をあらわすべし。されば毒酒の好をかねてだれ
まんべんなく万物乃害と毒と用る人の巧拙にあり。
その物にあらずして人にあらず。毒酒にあらず。
元来の性をやしなうことを旨として酒茶の功をあらわす

といへるわらべことをきけバ。貝原先生の口まね似たりと
やつて曲きうすまどこれ又まね蔵才の信まつじを説すもの。
たぬきとするすまがやてそくろつれづらくかえりぬ

居行子巻之三終